

自然は再生できるのか

島山 武道

私の職場内で、最近、多額の事業費を投下して、サクシュコトニ川復元事業なるものが一部完成した。早速いってみると、コンクリートで作られた川筋の横にアンツーカーの散策路が作られ、おまけに橋までかかっている。再生というが、昔のサクシュコトニ川は、本当にこんな姿をしていたのだろうか。復元に名を借りた土木工事ではないのか。

そんな危惧をさらに増幅させかねないのが、今回成立した自然再生推進法である。この法律については、さまざまな批判がなされており、当協会も反対の立場を明らかにしたが、ここでは、より本源的に、そもそも「自然の再生とは何なのか」「本当に自然を再生できるのか」という問題を考えてみたい。

ところで、「自然」を再生させるというが、「自然」とは何なのか。たとえば、直線化された川の一部をほじくりかえして蛇行させ、河畔に植樹でもすれば、魚類や鳥類も増えるだろう。しかし、それで「自然」が再生したといえるのか。使われなくなった田圃に水を張り、鳥が飛来するようになれば「自然」が再生したことになるのか。なるほど、見た目には自然が再生したようにみえる。しかし、「自然」は外見や見てくれやではない。いくら外観（相観）が似ていても、それを構成する動植物の種構成が変化してしまえば、元の自然を再生したことにはならない。湖岸にいくらヨシやアサザを移植しても、それをとりまく種が変化してしまえば、湖の自然を再生したことにはならないと考えるべきではないのか。さらに、生物多様性という観点からみると、たとえば人工的に同じ種を生息・生育させても、遺伝子が異なる以上、元の自然と同じとはいえないのである。

1960・70年代に広く支持された古典的な生態学は、自然には自らを復元させる力があり、人間が手を加えなければ、元の安定した状態に戻ると考えた。しかし、最近の保全生態学は、自然は、有史以来、常に人間活動を含む周囲の影響をうけて変化しており、元の状態に戻ることはないという考えを基調としている。一度、ある生態系を破壊してしまえば、同じ生態系を作り出すことは不可能と考えるべきである。自然の再生が可能なることを理由に、安易にかけがえのない自然（在来の生態系）が破壊されるようなことがあってはならない。

生態系は、ほとんど人為の影響をうけたことのない原始的な生態系、かつて人の影響を受けたが、その後、人によって攪乱されることなく推移している生態系、大きく人の影響を受けているが独自の価値を有する生態系、常に人による管理を必要とする生態系、ほとんど生態系としての働きのない人工的な自然など、人間との距離を尺度にして、様々に区分することができる。原生的な自然だけが貴重で、人の手の加わった自然が貴重でないという考えは、おそらく誤りである。しかし、だからといって、人為の影響の少ない（貴重な）生態系と人工的に復元された生態系を同視する考えには、到底賛成できない。

アメリカでは、イエローストーンの生態系を回復するために、牧畜業者の猛反対を押し切って、カナダからオオカミを空輸し、公園内に放った。この事業は多くの環境保護団体から支持されているが、一部の有力な環境保護団体は、「自分たちは地力でイエローストーンに到着したオオカミを見たいのであって、ヘリコプターで空輸されたオオカミは見たくない」と主張し裁判をおこしている。日本では、ロシア産コウノトリや中国産トキを野生復帰させるための試みが地道になされている。こうした事業は、様々の点で有意義であり、実際の担当者の苦労も大変なものだと思う。しかし、それにもかかわらず、私は、この種の事業を率直に評価することができないのである。その理由は、以上に述べたことから理解していただけると思う。私の考えについて、いろいろの方のご意見を賜れば幸いである。

（北海道大学法学部教授、北海道自然保護協会副会長）